とうほく学生演劇祭主催企画レポート

2017年2月27日(月)、全国学生演劇祭(以下、全国)の開催期間に、とうほく学生演劇祭主催の企画、「大賞はいったい誰のすか？～おらだづの芝居も見てみてけさいん～」が、岡崎いきいき市民活動センターにて行われた。本企画は、今回事務局の意思として全国へ推薦団体を選出しなかったとうほく学生演劇祭(以下、とうほく)事務局が、全国を開催中の京都に乗り込み、とうほくの奨励賞を受賞した作品を参加者で鑑賞した上で、全国に参加している団体の中で順位をつけるとすればどの位置に当たるか、またそこから全国と各地の学生演劇祭の関係性や学生演劇祭のあり方について議論をしようという意図の下、企画された。

とうほく学生演劇祭による説明・作品鑑賞

まず、とうほく学生演劇祭事務局の中村大地より、とうほく学生演劇祭より団体を選出しなかった理由について説明がなされ(※１https://touhokugakuseiengekisai.jimdo.com/とうほく学生演劇祭３アーカイブ/審査結果について)、その上で今回のとうほく学生演劇祭で奨励賞を受賞した青森大学演劇団「健康」の作品、『雨恋』(作･演出：村下直光)の上映会が行われた。上映会は他の公演と異なり、映像での鑑賞という点に留意しなければならないが、『雨恋』について本企画の参加者からは、「45分間である意味が感じられない」「普段他の劇団の公演をあまり観ていないのではないか」といった厳しい意見が寄せられた。

【上映会の様子】

舞台芸術における地域差

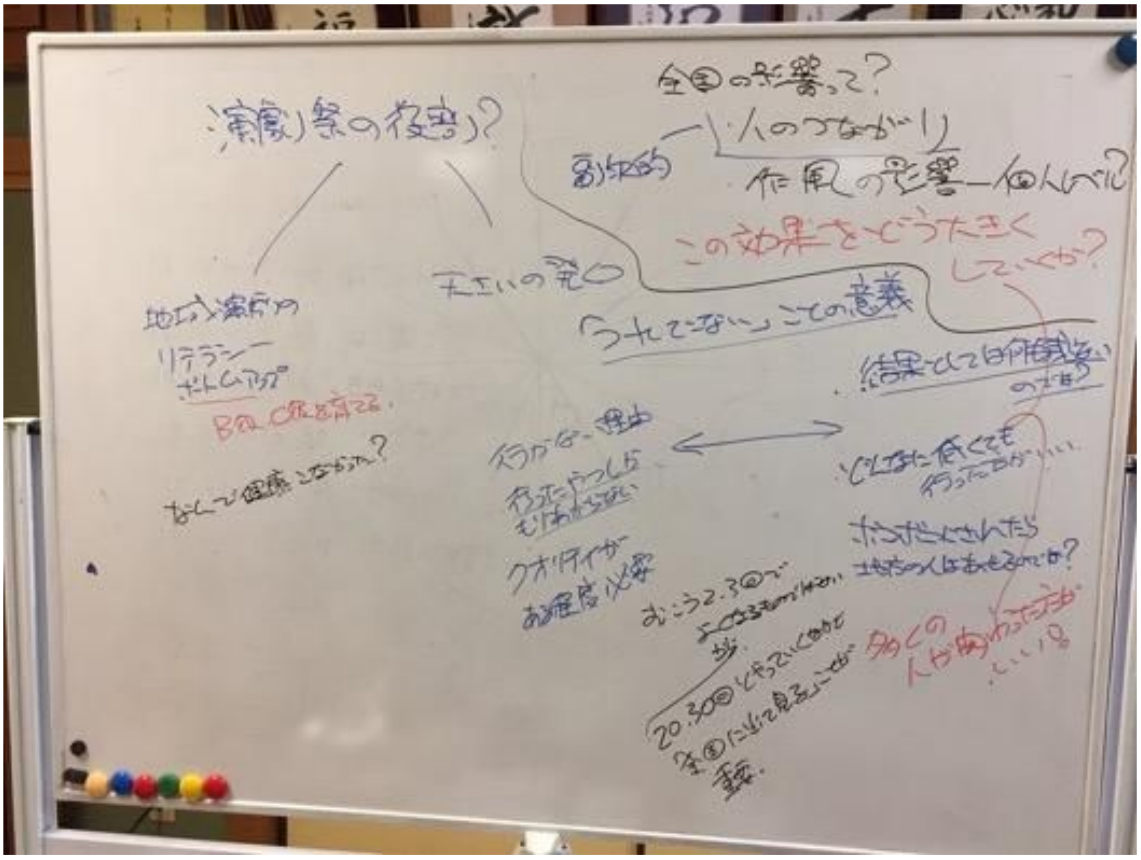
その上で、「観る機会」という観点から各地の舞台芸術の状況についても話がなされた。都市部と地方部においては、公演を観に行くことのできる環境(特に量的)に差がある

ことについての問題意識が共有された。今回の全国学生演劇祭で審査員賞を獲得した3団体がいずれも東京・京都の団体であることは、そのことを如実に表しているのかもしれない。

しかし、他方で全国のプレ企画と位置付けられ開催された「第0回全国学生演劇祭」ではとうほく代表の劇団「コメディアス」が高い評価を受けた（※参照http://jstf.jp/archive3/）ことや、今回の全国学生演劇祭に、とうほくに参加した団体があまり観に来ていないという現状を受け、地方による差はあるものの、やはり最終的には「自身がどのように動くか」が重要なのではないかという指摘もなされた。

その上で、学生演劇祭の意義として、各地の団体が同世代の団体の作品を鑑賞したり、期間中に交流をしたりすることで、相互に刺激を受け、意識を変えるための「第一歩」となる可能性が挙げられた。また、過去の参加団体では全国での交流をきっかけに、後に他劇団に客演として参加した事例なども紹介され、全国の開催時だけの交流ではなく、交流をきっかけとしてそこから発展させていくことの重要性も確認された。全国をきっかけに、10年・20年という長期的なスパンで各地の舞台芸術の土壌を少しずつ耕していくことを志向すべきとの意識も共有された。

【議論の様子。今回の参加団体からも企画への参加者があった】



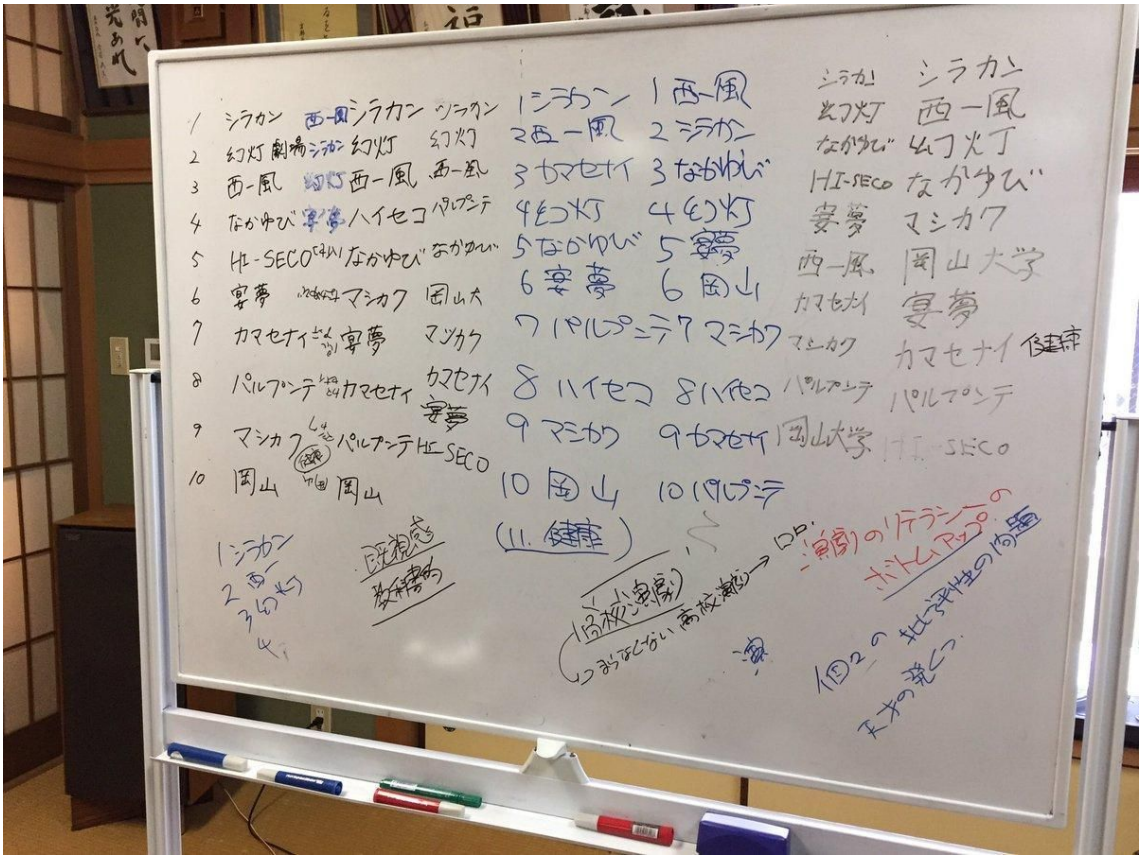
【話し合いの板書】

順位予想ととうほくの位置づけ

そして、本企画の目的の一つであった参加者による大賞・順位予想では、「隙が無い」との意見も上がったシラカン(東京)が1位との予想となった。2位3位で、西一風、幻灯劇場(いずれも京都)と続いた。

他方、下位予想も特定の劇団に集中することとなった。下位予想としては岡山大学演劇部、南山大学演劇部「HI-SECO」企画(名古屋)等が挙げられることとなった。これらの劇団には、45分という時間や作品のテーマの扱い方に対して厳しい意見が挙げられた。

更に、『雨恋』をこの順位の中に組み込むとすればどの位置になるかという中村からの問いに対しては、参加者の多くが10位や11位に相当するのではないかという結果であった。



【参加者による順位予想】

とうほく学生演劇祭の団体の不参加について

その一方で、議論を深めていくうちにとうほく代表を参加させた方が良かったのではないかという意見が多数を占めることとなった。それは、やはり実際に公演を行うことや、他劇団を鑑賞する・交流するといったところから刺激を受けるのであり、またその「場」を提供する役割として学生演劇祭はあるのではないかという意識からであったように考えられる。

但し、今回映像を鑑賞してみて、最下位辺りに位置づけられたこと、観客や参加団体に対する意識づけやクオリティの担保という観点から、全国への参加には一定のハードルを設けるべきというとうほくの姿勢は、学生演劇祭のあり方に一石を投じることとなったように思われる。今後は、長期的な視野を持って各地の舞台芸術を発展させていく(無論、発展させるという言葉の意味にも議論の余地はあるが)こと、すなわち継続性と、学生演劇祭自体が毎年一定のハードルを持って運営されるべきという指摘、すなわち「発展のための継続」が自己目的化してしまい、ただ継続させることにのみ重点を置いてしまうことのバランスをいかに確保していくかが重要となるだろう。

まとめ

　今回の企画では、参加団体や観客を交えて学生演劇祭のあり方や今回の参加団体の作品に関して活発な議論がなされ、濃密な時間を送ることができた。それと同時に、このような議論を行い、次の志向や行動に繋げていくことこそが、重要なのではないかと感じる時間でもあった。今後の学生演劇祭のあり方を左右するのは、事務局や委員会、各地の学生演劇祭をはじめとした運営部や参加団体、そして今この記事を読んでいる読者や観客であることを指摘して、結びに代えたい。

(書き手＝企画参加者・京都学生演劇祭2015会長　幸村和也)